

琵琶パールガラスの実現へ。

琵琶パール生産者と、ガラス作家とのコラボレーション。

滋賀独自の素材を使ってガラス制作はできないか。イタリアのベネチアングラス、チェコのボヘミアングラスなど、世界には様々なガラスの素材、技法、モチーフがあり、これを確立した地域は歴史も経済も活発に躍動しています。そこで滋賀に目を向けたとき、ガラスに添加する様々な素材を探したところ、近年注目を集めている琵琶湖の淡水真珠養殖「琵琶パール」が浮上しました。

イケチョウガイで育てる淡水真珠そのものは美しく個性的で大変魅力がありますが、貝殻は利用価値が少なくほとんどが廃棄されていました。溶けたガラスの中に貝殻を粉末にして混ぜ、ガラス作家のデザインとコラボレーションすれば何か新しい表現が出来るのではないかとの思いから、琵琶パールを養殖しておられる齋木産業株式会社の齋木勲さんと、ガラスと異素材を組合せて独自の表現を追求するガラス作家の五十嵐智一さんに協力をえて、黒壁オリジナル「琵琶パールガラス」の研究開発を進めることになりました。

「琵琶パールガラス」開発にあたり、まずはデザインと試作を担当する五十嵐さんにこの事業に対する思いと今後の可能性について伺いました。

聞き手／株式会社黒壁
広報担当 北村 馨

北村 ガラス作家になったきっかけについて教えてください。

五十嵐 僕は、もともとは金属専攻で大学に入りました。その科はガラスと金属両方あって、2年生の時にひととおり素材に触ることができました。最初にガラスに触った時はとていず先生に「吹いてみろ」と言われて、自分の息の力でガラスが「ぶおー」って膨らむのが一番驚きでした。というのは、今まで何か物を作る時というのは基本は外側をつくらないといけな。大きくするにはどんどん盛っていく。ところがガラスは内から力を入れて大きくなるとんでもないものだなと思いました。それで、終わった後、先生に「ガラスをやりたいです」と。それがスタートです。

北村 その経験が今のガラスと他の素材を合わせる技法につながっているのですか？

五十嵐 それは直接ではなくて、今僕がいろいろな異素材とか表情とかをだすのは、ガラスに対する僕の価値観からきています。僕は大学を出てから東洋ガラスに勤めて、ガラス工場のデザインに携わっていました。それで、個人でガラスを溶かしてやっていた時に、ガラスの品質を100%工場生産物に近づける事なんて無理なんです。例えば泡が入っていたり、脈理っていうのがでたりとか。でもそれが個人ベースの作り方なのです。



そこで逆転して、そういう生地から良いものが作れないか。綺麗なガラスを溶かそうってことに自分のベクトルを向けるのではなくて、自分出来るガラスからプラスα何か良いことはできないか。その中でその表情を探ったり、鉄と合わせたり等、結局それが最終的に個性になって、作品になって、今こういう流れになっています。これって、見つけよう、あれしようと思ってもやっぱりわからないし見えない。常に何か見て「あ、きれいだな〜」とか、「あ、これはあれと合わせたらどうなるだろう」とか、そうやって実験することが一番好き。

北村 真珠と組み合わせるといのは今回が初めてですか？

五十嵐 はい、僕もしたことない。さっき試作を見せてもらったのですが、それを見る前までのイメージは、貝はほぼカルシウムだから泡になるだろうと想像していました。以前骨灰をガラスにとり入れたことはあります。そのときに泡がたくさんふいた状態になったので、それに近いものになるだろうと想像していました。

北村 こちらで試作品を見てそれがガラッとかわったという感じですか？

五十嵐 「なるほど、やっぱりこうなったか」というものと、あともうひとつテストでやった中でですごく気になる表情がありました。

北村 普段使っている技法として吹きガラスやキルンワークなどがあるんですが、主に使う技法は何ですか？

五十嵐 今、僕の中には「主に」はもうないかもしれない。僕は実験とかいろいろしていて、そこで、いろんな技法を試してみる。結果的に「あ、これでこういうものを作りたいな」というときには手法を選ばない。

ガラスの作家さんでたぶん吹きガラスだったら吹きガラス中心でやる、キルンワーク中心でやる、そういうのが多いと思うんですよ。でも僕は今展示会とか見てくれる人も「あなた何やってる人なの？」とか「五十嵐今度キルンワーカー？」みたいな感じなんです。それはそれでいいと思っています。同じガラスから発してるんだから、もちろん其々の技法じゃなきゃその表情が出ないのは其々の技法を用いたい。今回のパールも「吹き溶解炉」で溶かして試みるんだけど、もっと違う技法での可能性がないかっていうのを試してみたいですね。

北村 最後に、今回の事業についての思いをお聞かせください。

五十嵐 良いものをつくりたいのはそうなんですけど、いろんな人がプロジェクトに関わってるわけだから、その英知を結集して良いものをお客さんが「あ！」って「これ何!」って手に取るような、度肝をぬくようなものを作りたいですね。

北村 楽しみです。ありがとうございました。



2015年8月
gallery AMISU
企画展作品



2016年10月
gallery AMISU
企画展作品